

21.河内名所図会を訪ねて その十五 大和川築留(剣先船③)

大和川水系で荷物を輸送した船は、剣先船だけではなく。柏原船、魚梁(やな)船、平田船を紹介します。

6. 柏原船

柏原は大和川と石川の合流点に位置するため、古代からたびたび洪水に襲われました。江戸時代に入ってから元和 6 年(1620)「淵川砂山に罷成」、寛永 10 年(1633)「柏原村家四五拾軒流れ、人三拾六人死」と深刻な洪水被害に見舞われ、自力では復興の目途が立たないほど荒廃しました。志紀郡代官の末吉孫左衛門は、復興策として平野川を利用した柏原～大阪間の荷物輸送を立案し、寛永 13 年(1636)40 艘の柏原船を造って営業を始めます。柏原船は長さ 7 間 4 尺の浅川船で、剣先船より一回り小さく、おおよそ 15 石を運びました。

営業は順調でしたが村の復興には十分でないため、寛永 17 年(1640)柏原の町造りを条件に大阪から参加を募って 30 艘を増やし、総数 70 艘とします。この時 2 艘の株を取得し、柏原に移住した伏見呉服町の大文字屋七左衛門が後の三田浄久です。三田家は柏原船の最後まで船持惣代を務めました。

働き場は柏原から京橋を越えて大阪市中の浜々に着船することを許されたため、大阪市中を働き場とする上荷・茶船仲間と繰り返し訴訟沙汰になります。明和 3 年(1766)、柏原船仲間から上荷・茶船仲間に対して、毎年銀 1 貫目の支払いと平野川の運行を一部認めることを確認して決着します。

大和川付替えの後、柏原船は河内から大阪までの最短距離を輸送する船となったため、荷物が集中し利益は 3 倍に増えます。その後 10 数年は順調に経過しましたが次第に経営が難しくなり、享和年間(1801-1804)には新造船の建造費用にも事欠くようになります。剣先船との競争もありますが、江戸時代後期の不況が背景にあるとされます。



柏原船の模型 (柏原市歴史資料館)



魚梁船の模型 (河合町公民館)

7. 魚梁船

大和の国中(くんなか:盆地部)にとって、大和川は大阪へ通じる唯一の水路ですが、亀の瀬に滝があり交通の難所でした。このため、亀の瀬より下流は剣先船、上流は魚梁船が働き場としていました。

魚梁船は慶長 15 年(1610)、片桐且元が立野村(三郷町)の地侍・安村喜右衛門に支配を任せて始まります。魚梁船の名前は、龍田大社にお供えするための魚を獲る場所「魚梁」に由来します。魚梁は亀の瀬の少し上流にありました。船の大きさは長さ八間半で、剣先船より少し小型でした。文化 5 年(1808)の記録によれば、1 組 7 艘の船を持ち、10 組で組織していました。組を作

るのは川が渇水状態になったとき、船人が共同して鋤鍬で水路を掘って船を通すためです。

扱う荷物は上りが肥料、下りは米や綿が中心でした。大和川とその支流に問屋場を設けて荷を積み下しました。田原本の北隣にあった今里浜の扱い量が最も多く、享保 3～9 年(1718～1724)は全体の半数を占めました。田原本は国中の中央に位置し、「大和の大坂」ともいわれた在郷町です。



大和川流域の主な問屋場『パンフレット今里浜』



亀の瀬『大和川筋図巻』

『大和川筋図巻』は亀岩の上流に「瀧 川幅三間一尺」と記しています。しかし、江戸時代の景観は明治 16 年(1883) 亀の瀬の堰工事や、その後の地滑りによって失われています。



龍田川『大和名所図会』

『大和名所図会』の挿絵「龍田川」は、亀の瀬を北から眺めた構図です。画面中央の建物が藤井問屋で、剣先船が係留している川岸を藤井浜といいます。藤井問屋は慶安年間(1648-1652)、長谷寺造営のための材木を取り次いだのが始まりとされます。剣先船の荷物を積み替えて、人馬で大和の村々に輸送しました。右下に見える船は魚梁問屋の浜に係留した剣先船です。荷役人夫が約1km 東にある魚梁浜まで荷を運び、魚梁船に積み替えました。なお、背景に見える山は特徴的な形からして最近人気の明神山でしょう。

8. 平田船

元文 5 年(1740)堺の惣年寄が平田船 100 艘の極印を受けましたが、宝暦 8 年(1758)廃船願いが出されます。20 年もたなかったのは、①新大和川が流出する土砂によって堺港は次第に埋没し明和 7 年(1770)に放棄された、②新大和川の運航には水路の構築・可航日数の制約など採算が取れなかった、ことが理由と考えられています。

(2021.8 古川)

資料 17 『柏原町史』1955 年

資料 18 『王寺町史』2000 年

資料 19 田原本町『パンフレット今里浜』

資料 20 秋里籬島編、竹原春朝斎画『大和名所圖會』